

令和6年度 高齢社会フォーラム  
-エイジレス社会の構築に向けて-  
報告書

令和6年

主催：内閣府、松山市

## 開会挨拶

みはら  
三原 じゅん子

内閣府特命担当大臣

---

内閣府特命担当大臣の三原じゅん子でございます。令和6年度高齢社会フォーラムの開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。



政府においては、年齢にとらわれず、全ての人々がその意欲や能力に応じて自由に生き生きと活躍できるエイジレス社会の構築を目指しています。そのような観点から、エイジレス・ライフ実践事例及び社会参加活動事例の表彰を平成元年度から実施しており、今回で36回目となります。

今年度は49名・29団体の皆様が受章者として選定されました。皆様の活動は、エイジレス社会を築き上げていく上で、その模範となるものです。心より敬意を表しますとともに、今後の更なるご活躍を祈念いたします。

我が国における65歳以上の総人口に占める割合は29.1%と世界で最も高い水準にあるとともに、2037年には33.3%と、国民の3分の1が65歳以上となるなど、さらなる高齢化の進展が見込まれております。そのような中で我が国の平均寿命は、この20年間で男女共に約3歳延びるなど上昇傾向にあり、高齢者の体力的な若返りも指摘されているほか、65歳以上の就業者や社会活動に参加している方についても近年増加傾向にあります。

その一方で、一人暮らしの高齢者の増加等のライフスタイルの変化や、認知機能が低下する方の増加等に伴う様々な影響や課題が懸念されております。こうした状況を踏まえ、政府では本年9月、新たな「高齢社会対策大綱」を策定し、基本的考え方として、「年齢に関わりなく希望に応じて活躍し続けられる経済社会の構築」、「一人暮らしの高齢者の増加等の環境変化に適切に対応し、多世代が共に安心して暮らせる社会の構築」、「加齢に伴う身体機能・認知機能の変化に対応したきめ細かな施策展開・社会システムの構築」の3点を掲げました。

こうした考え方の下、地域における社会参加活動の促進等を含め、各般の施策を政府一丸となって着実に推進していくこととしております。本日は「エイジレス社会の構築に向けて」というテーマのもと、地域でさまざまな活動をされている方々や有識者の方々をお招きしており、現場でのご経験や専門的な知見も踏まえた活発なご議論をいただきたいと考えています。

本日のフォーラムを通じて、皆様が新しい発見や活動のヒントを得て、それぞれの地域に持ち帰り、実践につなげていただければ幸いです。

最後に、エイジレス・ライフに関する表章にご協力いただきました関係者の皆様、本日ご登壇いただく皆様、また本フォーラムを共催いただきました松山市の関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、エイジレス社会

の実現に向けて、今後とも力を尽くしていくことをお誓い申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 内閣府による施策説明

きたがわ きんや  
北川 公也

内閣府政策統括官（共生・共助担当）付  
総合調整担当・高齢社会対策担当調査官

---



皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、内閣府の北川でございます。本日は新たな「高齢社会対策大綱」について簡単に概要を説明させていただきます。

新たな「高齢社会対策大綱」ですが、A4冊子53ページ程度の資料にまとめており、大量ですので、パワーポイントの2枚紙でエッセンスを抽出いたしましたので、このパワーポイントに沿って説明をさせていただきます。

まず初めに「高齢社会対策大綱」ですが、高齢社会対策基本法を根拠に策定されているものです。この高齢社会対策基本法は、政府が推進すべき高齢

社会対策の指針として基本的かつ総合的な高齢社会対策の大綱を定めなければならぬとされています。

この大綱を定めるに当たり、高齢社会対策会議というものが設置されておりまして、会長は内閣総理大臣で、委員は総理以外の全ての閣僚が任命されています。「高齢社会対策大綱」は高齢社会対策基本法に基づき、高齢社会対策会議が「高齢社会対策大綱」の案を策定し、そのうち全ての閣僚による閣議決定がなされるものです。

これまで、高齢社会対策大綱は今回の令和6年9月と合わせて5回策定されており、一番初めは平成8年の7月、2回目が平成13年の12月、3回目が平成24年の9月、一つ前になるものが平成30年の2月、そして今回5回目が令和6年9月に策定されたものです。

前回策定された平成30年の「高齢社会対策大綱」では、経済社会情勢の変化等を踏まえ、おおむね5年を目途に必要なと認めるときに見直しを行うものとするとしており、この規定に基づいて今回見直しを行ったものです。今回策定されたものについても同様の規定が設けられており、おおむね5年を目途にした政府の中長期高齢社会対策の指針として位置づけられています。それでは、資料に沿って説明をさせていただきます。

## 【概要】 高齢社会対策大綱（令和6年9月13日閣議決定）

### 目的及び基本的考え方

#### 1. 大綱策定の目的

- 「高齢社会対策」は、高齢者を支えるための取組だけでなく、**高齢者の割合が大きくなる中で持続可能な社会を築いていくための取組**。
- 我が国は世界に類を見ないほどのスピードで高齢化が進み、今後更に進展(高齢化率：29.1%(2023年)⇒38.7%(2070年))。人口構成や社会構造の変化に伴い、経済社会の担い手の不足(生産年齢人口は2040年までに約1,200万人減少)、**経済規模の縮小**のほか、**一人暮らしの高齢者の増加等のライフスタイルの変化や認知機能が低下する人の増加等に伴う様々な影響や課題が懸念**。
- 一方、我が国の平均寿命は世界で最も高い水準となり、高齢者の体力的な若返りも指摘。65歳以上の就業者は増加し続け、意欲も高い。  
⇒**年齢によって分け隔てられることなく、若年世代から高齢世代までの全ての人が、それぞれの状況に応じて「支える側」にも「支えられる側」にもなれる社会**を目指し、**全世代の人々が「超高齢社会」を構成する一員として、希望が持てる未来を切り拓いていくことが必要**。

#### 2. 基本的考え方

- (1) **年齢に関わりなく希望に応じて活躍し続けられる経済社会の構築**
- (2) **一人暮らしの高齢者の増加等の環境変化に適切に対応し、多世代が共に安心して暮らせる社会の構築**
- (3) **加齢に伴う身体機能・認知機能の変化に対応したきめ細かな施策展開・社会システムの構築**

「高齢社会対策大綱」の目的ですが、高齢者を支えるための取組だけではなく、高齢者の割合が大きくなる中で、持続可能な社会を築いていくための取組です。我が国は、世界に類を見ないほどのスピードで高齢化が進んでいます。これは更に今後進展することが予想されています。

2023年には、高齢化率は29.1%でしたが、2070年には38.7%になると推計されています。この数字は、2.6人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳以上になるという計算です。

こういった人口構成や社会構造の変化に伴って、経済社会の担い手不足や、一人暮らしの高齢者の増加とライフスタイルの変化や認知機能が低下する人の増加等に伴う様々な影響や課題が懸念されているところです。

そういうネガティブな情報がある一方、我が国の平均寿命は世界で最も高い水準で、さらに高齢者の体力的な若返りも指摘されています。65歳以上の就業者数は増え続けて、働きたいという意欲も高い状況です。65歳以上の就業者は20年連続で前年を上回る状況です。

これらのことを踏まえて、年齢によって分け隔てられることなく若年世代から高齢世代までの全ての人々がそれぞれの状況に応じて支える側にも支えられる側にもなれる社会を目指し、全ての世代の人々が超高齢社会を構成する一員として希望が持てる未来を切り開いていくということが必要であるとされています。この目的に従って、基本的考え方として3つが定められています。

1つ目が、年齢に関わりなく、希望に応じて活躍し続けられる経済社会の構築。

2点目が、一人暮らしの高齢者の増加等の環境変化に適切に対応し、多世代が共に安心して暮らせる社会の構築。

3点目が、加齢に伴う身体機能・認知機能の変化に対応したきめ細かな施策展開・社会システムの構築。

この3点を基本的考え方として掲げています。この目的及び基本的考え方に沿った形で大綱が定められています。

大綱は施策分野ごとに就業・所得や、健康・福祉、学習・社会参加、生活環境、研究開発・国際開発等という形でくくって策定されていますが、この基本的な考え方に沿ったものとして、大綱で記載されているものを概略記載したものが、この表の下段です。

生涯を通じて活躍できる環境の整備	
<p><b>1. 年齢に関わらない活動機会の拡大</b> ＜背景＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自己啓発を実施した労働者の割合は、20代以上では年齢層が高くなるほど低く、「60代以上」は約2割。</li> <li>○現在収入のある仕事をしている60歳以上の人について、「働けるうちはいつまでも」との回答が約4割、「70歳くらいまで」又はそれ以上まで働き続けたいとの回答を合計すると約9割に上る。</li> <li>○行政が力を入れるべき生涯学習の取組について、40代・50代では「インターネットを利用したオンライン学習の充実」が約5割、60代以上では「公民館等の開放などの学習のための施設の増加」が約4割でそれぞれ最多。</li> <li>○地域における社会参加活動を進めるために有効だと思う施策について、約4割が「簡単に社会参加活動に参加できる仕組み」、約3割が「実施されている社会参加活動内容の周知・広報」と回答。</li> </ul>	<p>＜大綱に盛り込む基本的施策＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○高齢期を見据えたスキルアップやリ・スキリングの推進（就業・所得）</li> <li>○企業等における経験やスキルに基づく配置、成果に基づく評価・処遇等に関する専門家の助言等の雇用の質の向上のための施策整備（就業・所得）</li> <li>○起業支援や高齢期のニーズに応じたハローワークのマッチング強化等の多様な就業等の機会の提供（就業・所得）</li> <li>○多様な主体の連携により地域社会の課題解決に取り組みするためのプラットフォームの構築、地域の仕事や活動等を各人の都合に合わせてモザイク型のジョブマッチングを行う仕組みの構築による地域社会の強い確保（学習・社会参加）</li> <li>○老人福祉センター等の地域の身近な場やオンラインにおける学習機会の充実（学習・社会参加）等</li> </ul>
<p><b>2. 高齢社会に関するあらゆる世代の理解の促進</b> ＜背景＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○インターネット利用率は年齢層が高くなるほど低い。（60代:90.2%、70代:67.0%、80歳以上:36.4%）</li> <li>○20代の73.5%が、社会保障制度に「全く関心がない」「あまり関心はない」と回答。また、学校等で金融教育を受けた経験がある人の割合は、18～29歳では13.9%、60～79歳では5.4%に留まる。</li> </ul>	<p>＜大綱に盛り込む基本的施策＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○幅広い世代における加齢に関する理解の促進（学習・社会参加）</li> <li>○携帯ショップや公民館等における講習会の実施等、デジタル等のテクノロジーに関する学びの充実による高齢期のデジタル・デバイトの解消（学習・社会参加）</li> <li>○早い段階からの社会保障教育・ライフステージに応じた金融経済教育の推進（学習・社会参加）等</li> </ul>

基本的考え方の一つとして、生涯を通じて活躍できる環境の整備が挙げられます。それに関しまして、年齢に関わらない活動機会の拡大という観点と、高齢社会に関するあらゆる世代の理解の促進という観点から、それぞれの状況背景を踏まえた上で、大綱に盛り込まれる施策が記載されています。

この施策の背景として、自己啓発をしている労働者の割合は、20代以上になると年齢が高くなるほど低くなり、60代以上では2割という状況があります。さらに、仕事をしている60歳以上の人々について見てみますと、働ける



うちは「いつまでも働きたい」という回答をしている人が約4割います。さらに70歳ぐらいまで、またはそれ以上働きたいと考えている方々を合わせると、約9割に上るといふ、就業意欲が高い状況があります。

行政が力を入れるべき生涯学習の取組について伺ったところ、40代、50代ではインターネットを利用したオンライン学習の充実が約5割、60代以上になりますと、公民館などでの学習のための施設の増加が約4割というような回答がなされていました。また地域における社会参加活動を進めるために有効だと思ふ施策について伺ったところ、約4割の方が簡単に社会参加活動に参加できる仕組みを、約3割の方が実施されている社会参加活動内容の周知広報を有効だと回答されているという実態がありました。

こういった実態を踏まえて、右側の緑の部分ですが、高齢期を見据えたスキルアップやリ・スキリングの推進が必要です。そういった取組や、企業などにおける経験やスキルに基づく配置、成果に基づく評価・処遇に関する専門家の助言など、雇用の質の向上のための環境整備をしていく取組が必要であると記載されています。

さらに、起業支援や高齢期のニーズに応じたハローワークのマッチング強化など、多様な就業機会の提供という取組が必要であることが記載されています。また、いろいろな主体の方々の連携により、地域社会の課題解決に取り組むためのプラットフォームの構築や、地域の仕事や活動など、それぞれの人の都合に合わせたモザイク型（仕事を更に細分化して業務レベルまでにした形）のジョブマッチング、そういった形のマッチングを行う仕組みを構築することによって、地域社会の担い手等を確保していこうという取組があります。さらに、地域の身近な場やオンラインによって学習機会の充実を図っていくことが大綱に記載されています。

あらゆる世代の理解促進ということで見えていきますと、大綱の中では、幅広い世代における加齢に関する理解を促進していこうということや、携帯シヨップや公民館などで講習会を実施し、デジタル等のテクノロジーに関する学びの場を充実させ、高齢期のデジタル・デバイドを解消していこうという取組が記載されています。また、若いうちから早い段階での社会保障教育や、ライフステージに応じた金融経済教育の促進も取り組んでいこうということが大綱に記載されています。

次に基本的考え方のうちの2つ目ですが、一人暮らし高齢者の増加等に対応できる環境の整備についてです。

<p><b>一人暮らしの高齢者の増加等に対応できる環境の整備</b></p> <p><b>&lt;背景&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○医療・介護の複合ニーズが高まる<b>85歳以上人口は増加</b>を続け、<b>2060年には約1,170万人</b>となる見込み。(2023年：約670万人)</li> <li>○2040年度までに更に<b>57万人の介護職員の確保</b>が必要と見込まれる。</li> <li>○介護離職者数は年間約10万人で推移、<b>2030年の介護離職等による経済損失額は約9.2兆円</b>。</li> <li>○<b>65歳以上の一人暮らしの人の数は、2040年には2020年より370万人増加し、約1,041万人</b>となる見込み。</li> <li>○近年持家率は<b>20～50代で低下傾向</b>。高齢者の一人暮らしが増加する中、高齢期の住宅の確保に対するニーズは高まる。一方、<b>高齢者の入居については、賃貸人の約7割が拒否感</b>。住み替えのピークは<b>75～85歳</b>と遅く消極的な住み替えも。</li> <li>○使用目的のない空き家は、この20年間で<b>1.8倍の385万戸</b>に増加。</li> <li>○<b>60代以上の老後生活の不安として「移動が困難」と回答の割合は、人口規模の少ない市町村ほど多く、人口5万人未満では7割弱</b>。</li> </ul>	<p><b>&lt;大綱に盛り込む基本的施策&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○在宅医療や在宅介護の質・量両面での充実を含めた<b>地域包括ケアシステムの構築</b>の一層の推進 (健康・福祉)</li> <li>○<b>処遇改善や介護の仕事の魅力向上等</b>を通じた<b>介護人材の確保</b>の推進 (健康・福祉)</li> <li>○介護ロボットやICT機器等テクノロジーを活用した<b>介護現場の生産性向上</b> (健康・福祉)</li> <li>○<b>仕事と介護を両立できる雇用環境の整備等</b>の推進 (健康・福祉)</li> <li>○<b>高齢者等終身サポート事業者の適正な事業運営の確保</b>や地域の社会資源を組み合わせた<b>包括的支援のコーディネート等</b>の<b>身寄りのない高齢者等の支援の充実</b> (健康・福祉)</li> <li>○住宅、福祉等の関係者が連携した<b>地域における総合的・包括的な居住支援体制の整備等</b>を通じた<b>居住支援の充実</b> (生活環境)</li> <li>○空き家の有効活用等の<b>空き家対策の推進</b> (生活環境)</li> <li>○<b>地域公共交通の「リ・デザイン」の加速化</b>や<b>自動運転技術の社会実装</b>に向けた取組の推進等による<b>地域における移動手段の確保</b> (生活環境)</li> <li>○<b>高齢社会の課題解決に資するAI技術の研究開発の促進</b> (研究開発等) 等</li> </ul>
--	--

これは基本的に85歳以上の人口が増加を続けているという状況で、2060年には1,170万人になると見込まれています。さらに、2040年度までに57万人の介護職員の確保が必要と見込まれている状況です。また介護の離職者は年間約10万人で推移しており、2030年の介護職員等による経済的損失額は約9.2兆円という試算もあります。

今度は生活部門についてですが、65歳以上の一人暮らしの数は2040年には2020年のときよりも370万人増加し、1,041万人になると見込まれています。そ

ういった状況の中で、最近の持家率は20代から50代では低下傾向にあります。

一人暮らしの高齢者が増える中、高齢期の住宅確保ニーズが高まっていますが、その一方で、高齢者の入居について賃貸人や大家さんの約7割が拒否感を示しているというデータもあります。住み替えのピークは75歳から85歳の遅い年代になっており、消極的な住み替えが余儀なくされている状況が読み取れます。

空き家についてですが、使用目的のない空き家はこの20年間で1.8倍の385万戸に増加しています。移動に関しては、60歳代以上の老後の生活の不安として「移動が困難」と回答した方の割合が、人口規模の少ない市町村（人口5万人未満）では7割弱の人々が移動困難を不安に感じているということが分かっています。

こういった背景を踏まえて、右側の赤い部分ですが、地域包括ケアシステムの構築の一層の推進を図っていくことが求められています。また処遇の改善や介護の仕事の魅力向上を通じて、介護人材の確保を推進していく取組も必要です。テクノロジー等を活用した介護現場の生産性向上、仕事と介護を両立できる雇用環境の整備を図ることも求められています。

さらに、高齢者等の終身サポート事業者の適正な事業運営の確保や、地域の社会資源を組み合わせた包括的支援のコーディネートを行い、身寄りのない高齢者等への支援を充実させていくことが取り組まれています。また住宅、福祉の関係者が連携し、地域における総合的・包括的な居住支援体制を通じて居住支援を充実させていく取組も進めています。

また、空き家の有効活用と空き家対策を推進し、移動に関しては地域公共交通の「リ・デザイン」の加速化や、自動運転技術の社会実装に向けた取組の推進が必要です。これらを通じて、地域における移動手段の確保を図って

いくことが求められています。さらに、高齢社会の課題解決に資するAI技術の研究開発を進めていく取組も、大綱に規定されています。

基本的考え方の3つ目ですが、身体機能・認知機能の変化に配慮した環境の整備についてです。

身体機能・認知機能の変化に配慮した環境の整備	
<p><b>&lt;背景&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○65歳以上の認知症及びMCI（軽度認知障害）の人の数は今後増加し、2040年にはそれぞれ584.2万人（有病率14.9%）、612.8万人（有病率15.6%）となる見込み。（2022年：認知症 443.2万人（有病率12.3%）、MCI 558.5万人（有病率15.5%））</li> <li>○特殊詐欺の被害者の約8割が65歳以上。</li> <li>○75歳以上の運転者による死亡事故件数は最近増加傾向にあり、2023年は384件の死亡事故が発生。</li> <li>○バリアフリー化やユニバーサルデザイン化の進捗状況について、「十分進んだ」又は「まあまあ進んだ」と回答した人は、60代・70代で3割程度にとどまっている。</li> <li>○市町村における避難行動要支援者の個別避難計画について、未着手が全体の約8%であるなど地域差がある。</li> </ul>	<p><b>&lt;大綱に盛り込む基本的施策&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○認知症基本法に基づき、認知症の理解の増進や早期発見・対応のための関係機関間の連携強化等の施策の総合かつ計画的な推進（健康・福祉）</li> <li>○加齢による難聴等の早期スクリーニングや定期的ケア、地域や職場の理解促進、感覚を拡張・代替するテクノロジーの活用等による身体機能・認知機能の状態に関わらず生活しやすい環境整備（健康・福祉）</li> <li>○個人情報を円滑に共有し得る仕組み（消費者安全確保地域協議会等）△の金融機関の参加の促進による必要な支援につなぐ取組の推進等、金融経済活動における認知機能の低下した人への支援強化（生活環境）</li> <li>○地域協議会の設置促進や消費生活相談のDX等の相談体制の充実による消費者被害の防止（生活環境）</li> <li>○運転免許証の自主返納をしやすい環境整備やサポートカー限定免許の推奨等の認知機能の変化に応じた交通安全対策の推進（生活環境）</li> <li>○情報アクセシビリティや建築物等のバリアフリー化の推進（生活環境）</li> <li>○高齢期の特性に配慮した防災・防犯対策の推進（生活環境） 等</li> </ul>
<p><b>今後の高齢社会対策の推進に当たって</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○関係行政機関の間の緊密な連携・協力、施策相互間の十分な調整、各分野における数値目標及び参照指標の設定</li> <li>○施策の推進状況の検証・評価を踏まえ、必要な改善を行うための仕組みの構築</li> <li>○地域の企業・団体やNPO等の多様な主体との連携等により、地方公共団体における地域の特性を活かした施策の展開を後押し</li> </ul>	

この背景として、65歳以上の認知症およびMCI（軽度認知障害）の人の数が今後増加することが見込まれており、2040年にはそれぞれ584万人、有病率としては14.8%になるとされています。MCIにおいては、612.8万人になると見込まれています。

特殊詐欺の被害者の約8割が65歳以上であるという状況です。また、75歳以上の運転者による死亡事故件数は最近増加傾向にあり、2023年のデータでは384件の死亡事故が発生しています。

そして、バリアフリー化・ユニバーサルデザイン化の進捗状況についてですが、60代・70代の3割程度が「十分進んだ」または「まあまあ進んだ」と回答していますが、これは若い世代に比べるとあまり進んでいないという比較結果となっています。

また、市町村における災害時の避難行動要支援者の個別避難計画について、未着手の市町村が全体の8%あるということなど、地域差が生じているという実態もあります。

こういった背景を踏まえて、高齢社会対策大綱では、認知症基本法に基づいて認知症の理解の増進や、早期発見・対応のための関係機関の連携強化、そして施策の総合的かつ計画的な推進を図っていくことが求められています。

また、加齢による難聴等の早期スクリーニングや定期ケア、地域や職場の理解の促進、感覚を拡張・代替するテクノロジーの活用等により、身体機能・認知機能の状態に関わらず生活しやすい環境を整備していく取組の推進、そして個人情報をも円滑に共有できる枠組みとして、消費者安全確保地域協議会等を設け、日頃高齢者と接することの多い金融機関の参加促進により、必要な支援へとつなげる取組を推進していきます。さらに、金融経済活動における認知機能が低下した人への支援を強化し、消費者被害を防止する取組を進めていきます。

運転に関しては、運転免許証の自主返納をしやすい環境整備やサポートカー限定免許の推奨、認知機能の変化に応じた交通安全対策を推進していきます。また、バリアフリー化の推進や高齢期の特性に配慮した防災・防犯対策も推進していきます。

主な概要をピックアップしたものですので、さらに詳しい内容については、大綱の全文をお読みいただければご理解いただけるかと思えます。内閣府のホームページなどでは、この大綱の本文全体が掲載されていますので、お時間があるときにお読みいただければ幸いです。

以上、駆け足となりましたが、私から新たな「高齢社会対策大綱」の説明を終わります。ありがとうございます。



## 基調講演

ありま ひろみ  
有馬 廣實

拓殖大学名誉教授

---

皆様こんにちは。今ご紹介いただきました有馬でございます。

今日はお忙しいところ、ようこそおいでくださいました。基調講演という非常に重要な役目を仰せつかりまして、大変感謝しております。皆様の前でお話ができることを大変光栄に存じております。



本日は、高齢社会フォーラム「エイジレス社会の構築に向けて」をテーマとするパネルディスカッションがありますが、その前に、私は本年度のエイジレス・ライフ実践事例、そして社会参加活動事例について、選考結果も含めて少しお話をさせていただきます。

これは内閣府から各都道府県・市町村に依頼して集めていただいたものです。エイジレス・ライフ実践は、個人の活動が国民の皆様に対するロールモデルとして表章されるもので、70事例の応募があり、うち49事例（49人の個人）が選考されました。社会参加活動事例では48事例の応募があり、その中から29事例（29団体）が選考されました。

このパワーポイントにありますように、エイジレス・ライフ実践は7つの類型に分かれています。

AからGの類型に分かれています、この中で最も応募が多か

(参考2) 総括表及び推薦書に記載の「類型」(エイジレス・ライフ実践事例)及び「事例区分」(社会参加活動事例)は、以下のとおり。

○エイジレス・ライフ実践事例		比率 (パーセント)
類型	活動例	
A	過去に培った知識や経験を高齢期での社会生活に生かしているもの	33
B	高齢期に入る前から計画的に準備し、成果を上げているもの	9
C	今までの職務や経験にとらわれることなく、高齢期を新しい価値観で生きているもの	10
D	地域社会においてリーダー的な役割を發揮しているもの	37
E	若者や子育て世代を支援するなど、多世代が支え合う活動を行っているもの	7
F	デジタル技術の活用で成果を上げているもの	0
G	その他、広く全国に紹介することがふさわしいと認められるもの(A～Fの類型にこだわることなく、事業の趣旨に照らして広く全国に紹介するに値すると考えられるユニークな事例も対象とする(高技能労働者の継続就労、自らの知見の諸外国への発信、外国との国際交流活動など。)	4

ったのは類型D（地域社会においてリーダー的な役割を發揮しているもの）

で、約4割、37%を占めています。これらの方々の多くは、ご自身が高齢者であるにもかかわらず、1つや2つの活動のリーダーではなく、福祉活動や高齢者の見守り、地域の防犯活動、環境の美化・清掃、地域の伝統文化の振興など、多方面の活動のリーダーを務め、まさに八面六臂の活躍をされています。これに次ぐのが類型A（過去に培った知識や経験を高齢期での社会生活に生かしているもの）で、全体の3分の1を占めています。

一方、少ない類型では類型F（デジタル技術の活用）が全くないという状況です。残念ながらこの類型は0件でした。類型G（その他広く全国に紹介することがふさわしいと認められるもの）は4事例のみという結果でした。デジタル関係の応募が少ないのは残念です。

それから社会参加活動の事例を見ますと、最も多いのが区分6（福祉、保健）です。これは在宅高齢者の生活支援や認知症高齢者支援活動などであり、全体の3分の1を占めています。第2位は区分3（教育、文化）で27%。第3位は区分1（支え合い活動）で19%となっており、これらで全体のほぼ8割を占めています。

事例区分	活動例	比率
1	支え合い活動(若者へのカウンセリング、子育て支援、高齢者の見守りなど)	19
2	生産、就業(起業及び起業のための支援活動を含む。)(高齢者が行う専門的業務、軽作業、農業、サービス業など)	0
3	教育、文化(教養講座、読書会、演劇活動、子供の育成、職工活動の伝承、知見の諸外国への発信、外国との国際交流活動など)	27
4	生活環境改善(環境美化、緑化推進、まちづくりなど)	4
5	安全管理(交通安全、防犯・防災など)	2
6	福祉、保健(在宅高齢者の生活支援、認知症高齢者への支援活動など)	33
7	地域行事(祭りなど地域の振興の運営など)	4
8	デジタル技術を活用した社会活動	2
9	その他、広く全国で紹介することがふさわしいと認められるもの((1)~(8)の事例区分にこだわることなく、事業の趣旨に照らして広く全国に紹介するに値すると思われるユニークな事例も対象とする。)	8

このように言いますと、エイジレスの活動は培ってきた知識、知恵、経験、技術などを生かし、自分を生かし、仲間を生かし、社会を生かすものとなっていることが見て取れます。

しかし、個人であれ団体であれ、常に仲間の協力や社会の支援がないと成り立ちません。仲間の協力や社会の支援があって初めて成果を生じるのです。その意味で、エイジレスの活動は、自分を生かし、仲間を生かし、社会を生かすものであると同時に、仲間から生かされ、社会から生かされていると考えることができます。すなわち、エイジレスの活動は自分、仲間、社会が互いに生かし合う相互支援活動と言えると思います。

しかしその最初のきっかけを作ったのは、やはり今回表章された個人や団体であり、そのことに対して大いに敬意を表すべきだと考えます。

今度は活動年数から、活動歴20年以上の事例をちょっと見てみます。まず、エイジレス・ライフ実践、いわゆる個人の活動についてです。これを20年から20年以上を含めると、

20～29年	19事例	27%
30～39年	12事例	17%
40～49年	3事例	4%
50年以上	5事例	7%
	計39事例	56%



39事例で56%、つまり6割近くになります。6割近くの方が20年以上も頑張っていて活動しているということです。10年刻みで見ると、20～29年の間が最も多く、27%となっています。しかし、これはちょっと考え方が難しく、若い頃に始めた方と、退職後に始めた方では、年数の計算が異なってきます。当然違って来るわけですが、いずれもすべてを合わせると、20～29年間活動されている方が27%、30～39年活動されている方が17%となっています。40～49年が4%です。そして驚くべきことに、50年以上活動されている方が7%というわけで、本当に驚くべきことですが、深く敬意を表せざるを得ません。

次の社会参加活動事例でいいますと、20年以上は全部で15事例で30%。そのうち50年以上という団体が10%あります。人はいろいろ変わるかもしれませんが、団体の活動の理念を引き継いで、ベテランからその次の後継者、そして次の後継者ということで、なんと50年以上も活動している団体があると。これも大いに尊敬すべき活動団体だと思います。

20～29年	9事例	19%
30～39年	1事例	2%
40～49年	0事例	0%
50年以上	5事例	10%
	計15事例	31%

ここでエイジレス・ライフ実践の比率の小さな類型の事例について見てみたいと思います。いろいろあるのですが、私は10年間選考委員を務めさせていただきましたが、常に気になっていたのが、国際交流活動の事例の応募が少ない。年度によっては、全くないということです。個人でも団体でも高齢者が過去に培った知識や経験を生かして、地域からの国際化に貢献していただきたいと。それによって高齢者自身の国際化や交流活動を進めるととも

に、青少年の国際交流活動の芽を伸ばしていただきたいと願っております。

日本のように民主主義の国では、何事にせよ地方や地域のイニシアティブが非常に重要です。国際化に関しても同様です。それが究極的には世界の平和に繋がるのです。国が決めたから従うのではなく、北海道から九州、沖縄までそれぞれの地域で、国際化を果たすことが大切です。それがしばらく前に言われたのが、地域からの国際化です。ただ、なかなか今までは話題に上がってこなかったのですが、最近ようやく少しずつ上がってくるようになりました。

国際交流活動に関しては、エイジレス・ライフ個人の実践では1事例（1人）、社会参加活動では2事例（2団体）が選考されています。今後国際交流活動を始め、これまで少数事例であった分野の応募が増えることを心から願っています。それは高齢者のエイジレスな活動の多様性を如実に物語ることになります。

さらに、今回のパネルディスカッションのテーマは「エイジレス社会の構築に向けて」です。その中で居場所の関連が大きな比重を占めると思われます。居場所がテーマになるということは、次のパネルディスカッションのために先に述べておいたわけですが、国際交流活動に関して活動されている方の事例を少し見てみます。

まず、エイジレス・ライフ実践事例についてお話しします。大阪の方で、77歳の方ですが、活動歴は17年です。この方は中国語を使った活動を「通詞」と表現されています。我々は通常

**エイジレス・ライフ実践事例**

**田中 徹氏（A類型であるが、G類型とも関わる）**

**大阪府大阪市**

**77歳**

**活動歴17年**

「通訳」と言いますが、これは長崎以来の伝統で「通詞」という言葉が使われているそうです。この方は日中友好活動や手話通訳、点字訳など、様々なボランティア活動に取り組んでおられます。その中の1つが中国語の通詞ということです。

中国語通詞 及び 日中友好活動  
手話通訳  
点字訳

若い頃から中国に興味を持ち、中国語の学習を続けてこられました。また大阪市の小学校教員となってからは、知的障害や視覚障害、聴覚障害のある児童への教育を通じて、点字や手話の技術を習得されてきました。

非常に真面目な方で、17年間にわたり様々な技術を身に付けてこられました。退職後は学童保育に携わり、知的障害を持つ家庭や来日中国人親子の通訳、ろうあ者の親の手話通訳など、様々な場面でその知識と技術を役立ててこられたそうです。以上が、この方の個人の事例です。

次に社会参加活動の事例についてお話しします。国際交流の会「かるみあ」という団体があります。この団体は区分3の教育、文化、国際交流に分類され、福島県郡山市で活動しているものです。活動歴は29年と非常に長く、その継続性は立派なものです。構成員は20人とそれほど多くはありませんが、平均年齢は66.4歳です。活動を通じて若い人材をリクルートし、高齢者としての成長を促してこられたと。このような取組は表立って語られませんが、十分それが予測されます。

#### 社会参加活動事例

国際交流の会 かるみあ  
区分3（教育、文化、国際交流）

福島県郡山市 活動歴29年  
構成員22人 平均年齢66.4歳

「かるみあ」という名称について調べてみましたが、これは通常「アメリカシャクナゲ」とも呼ばれる植物に由来するそうです。この花はピンク色

で、一つ一つが金平糖のような小さな花が集まって咲き、全体として非常に見事な花を咲かせるのが特徴です。この姿を会員一人一人が成長し、それが集まって大きな働きをするという理念に重ねられ、会の名称としたとのことです。

この写真のような花です。これは船橋市の公園協会の記事から取りました。次にこちらは東京都の神代植物公園になります。



「かるみあ」は1995年（平成7年）、阪神・淡路大震災の年に設立されました。この年はボランティア元年とも呼ばれますが、実際にはそれ以前からボランティア活動が行われていました。福島県国際交流協会の通訳ボランティアに登録していた有志メンバーが、身近な国際交流を目指して活動を開始したことがきっかけです。翌年には、外国人の方々から「生活のために日本語を学びたい」という声上がり、それを受けて日本語学習ボランティアが始まったとのことです。

現在の活動内容としては、国際文化交流活動、日本語学習ボランティア活動、地域国際化協力活動などが挙げられます。特に地域の国際化を目指した取組が重要な柱となっています。それぞれが文化や世代の違いを認め合い、それぞれの個性を



生かすことができるコミュニティづくりを目指して、活動を続けているとのこと。

もう一つ、「神話の杜みやざき」というグループがあります。このグループも教育、文化、国際交流の分野で活動しています。活動拠点は宮崎県宮崎市です。活動経歴は7年と短いですが、宮崎には古

**社会参加活動事例**

神話の杜みやざき  
区分3（教育、文化、国際交流）

宮崎県宮崎市 活動歴7年  
構成員15人 平均年齢67歳

事記や日本書紀に登場する神話にゆかりのある場所が多く存在し、宮崎神話は「宮崎の宝」となっています。しかし、宮崎県民でも神話についての理解が浅く、物語そのものを詳しく知らない人がいるようです。

「神話の杜みやざき」では、神話普及活動として、こどもから大人まで分かりやすい内容に構成し、興味・関心を持ってもらえるように、演劇、音楽劇、紙芝居など、これまであまり見られなかった手法を用いて伝えようとしています。

この活動だけでは国際交流と関わりがないように思えますが、活動の対象が高齢者だけでなく、児童や生徒といった若い世代との交流も含まれており、年齢に関係なく楽しみながら生きがいを作る機会となっています。また「神話のふるさと宮崎」をアピールすることで、地域貢献の役割も担っています。非常にすばらしい取組だと思えます。

今後は従来の活動に加えて、日本神話を世界中に広めることを目指しているそうです。具体的には、神話を英語に翻訳した「和英対照日本神話」という本を出版する予定で、この本には英語朗読のCDが付属します。この本を県内全ての小中学校、高校、大学、そして図書館に寄贈する計画があるそうです。とてもすばらしい取組だと思えます。こうした活動を通じて、多くの人

が神話に親しみ、自分たちの地域の歴史をもう1回学ぶ機会を得られることを期待しています。

次のテーマは居場所についてです。居場所というのは、誰もが気軽に集まり、交流を通じて生活の楽しみを充実させられる集会場のような場所や施設のことを指します。場合によっては、ネットワーク型の居場所も考えられます。

若い人たちはネットワーク型の居場所をうまく活用できるでしょうが、高齢者の場合は、やはり生身の人間が顔を合わせて交流する方がより好ましいと思われれます。居場所は誰にとって必要かと考えた場合、全ての人々にとって必要だと考えられます。かつては、居場所を通じて様々なトラウマを解消し、社会復帰を図るという役割が注目されていましたが、最近では誰にとっても必要な存在であると考えられています。

今回のテーマに沿って考えた場合、居場所の対象者として高齢者が挙げられます。特に会社と自宅しか知らないサラリーマンが退職した直後の、まだ地域に根を下ろしていない段階の方や、単身高齢者の場合が当てはまります。

昨日の新聞やニュースで気付いたことですが、65歳以上の単身住まいの高齢者が20%を超え、5世帯に1世帯の割合で高齢者が1人住まいをしているという報道がありました。このような方々には、ぜひ地域の居場所に集まっただけ、日々の生活を豊かなものにしていただければ、仲間とともに地域活動に加わっていただけたと思われれます。

一方で、居場所の対象者は高齢者だけに限りません。中年層や少年、青少年も含めて考えるべきです。特に学校では、小学校や中学校での不登校が以前から問題になっています。数年前、不登校が10万人を超えたという報道に

驚きましたが、最近では34万人を超えているというニュースがありました。これでは従来の受け皿であるフリースクールや自由な活動を行う塾では対応しきれないと思います。

さらに、障害者や学校、組織の中でいじめに遭い、トラウマを抱えている人々。学校や組織に馴染めず排除された人々。依存症から抜け出したにもかかわらず社会復帰が難しい人々。または犯罪から更生したものの社会に受け入れられない人々など、多様な事情を抱えた人々にとっても、居場所は必要な拠点であると思います。

これは正に、SDGsで掲げられている「誰一人取り残さない」というインクルージョンそのものです。広い視点で見れば、生きていくために必要な生存権の問題。そしてそれを保証する福祉の課題になります。

日本の高齢者は、日本の福祉の長所も欠点もよく理解しており、ボランティアのアドバイザーや協働活動者として関わるのに最適な存在だと考えられます。エイジレス活動の実績を積んできた経験豊富な高齢者には、ぜひ積極的に居場所の設置や運営にも関わっていただきたいと思います。

居場所では、高齢者を含めた多世代の交流が日常的に行われます。この多世代交流は、今回のパネルディスカッションのテーマの1つになると考えられます。

それでは、そろそろまとめに入りますので、クラーク博士について少しお話しします。かつて札幌農学校で学生を指導し、北海道農業の発展に貢献したクラーク博士は、あの有名な言葉「Boys be ambitious」（少年よ大志を抱け）を残しました。この言葉は非常に有名ですが、その背景や続きについて触れたいと思います。

クラーク博士は明治9年新設の札幌農学校の教頭として招へいされ、教育と北海道農業に大きな革新をもたらしました。「Boys be ambitious」という言葉だけが広く知られていますが、この言葉には続きがあるのです。その全文は、「Boys be ambitious like this old man.」となります。「少年よ、この老人の私のように大志を抱きなさい」という意味になります。

当時、クラーク博士は50歳でした。今では50歳は決して老人ではありませんが、当時の感覚では老人と見なされていたのかもしれませんが。現在の70歳の方々も、自分を高齢者と思っけていても、老人とは考えていない方が多いです。つまりクラーク博士の言葉に従えば、70歳でも80歳でも、まだまだ大志を抱くことができるということです。皆さまにも、これまで以上に大志を抱いていただきたいと思います。

さらに、古代ギリシャの賢人キケローについてもお話しします。この方は、古代ローマの哲学者であり政治家で、「老年について」という著書があります。岩波文庫から出版されており、小さな本なので手に入りやすいと思います。キケローは紀元前の人物、つまり2000年以上前の方です。キケローが言った言葉に、「まことに老年の誉れの尤（ゆう）なるものは、影響力なのだ」というものがあります。たとえば、次の世代に役立つように木を植えるけど、老人として他人のためにオリーブ園を植えぬ者はないと。地中海世界ではオリーブの木を指しますが、日本ではリンゴや栗、どんぐりなどに置き換えられるかもしれません。

当時、木は実がなるだけでなく、材木にもなり、環境にも良い影響を与えるなど、あらゆる意味で重要でした。キケローは、「次の世代に役立つ木を植えることで影響力を示すことができる」と語っています。いわゆる、オリ



ンピックなどでもよく言われる「レガシー（遺産）」としても残すと。それがレガシーとしての影響力だということです。

皆様も次の世代に役立つように、今後とも一層エイジレス社会を進めていただけるようお願いしたいと思います。そして、焦らずリラックスしつつ、多方面に影響力を行使してくださることを願っています。

影響力を持つ人は、現代では「インフルエンサー」と呼ばれることがありますが、2000年以上前からその概念は存在していたのです。皆さまもぜひインフルエンサーとして影響力を行使して、エイジレス社会の形成促進、居場所の設立、多世代交流の中心として活用・誘導の継続をお願いします。

最後に、皆様のエイジレス活動や社会参加活動について、都道府県や市町村から報告される事例を見ると、本当にユニークで、しかも長期にわたる素晴らしい活動が多く見受けられます。このような努力には心から敬意を表します。どうぞこれからも、自分のため、仲間のため、社会のために、楽しみながら未永く活動を続けていただきたいと思います。以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

# パネルディスカッション

## コーディネーター

ありま ひろみ  
有馬 廣實（拓殖大学名誉教授）

## パネリスト

うの すみえ  
宇野 須美恵（令和6年度エイジレス章受章）

こうもと あゆみ  
河本 歩美（NPO法人地域共生開発機構ともつく理事長）

なめき ようこ  
行木 陽子（中央大学商学部特任教授）

むらおか のりこ  
村岡 則子（聖カタリナ大学人間健康福祉学部社会福祉学科教授）

---

### （有馬）

この時間からはパネルディスカッションということでエイジレス社会の実現に向けて、誰もが年齢やその他の属性に関わらず、人や社会との繋がりや役割を持ち、活躍できる場所をつくるために何が必要かということで4人のパネリストの方にいろいろお話を伺っていきたいと思います。

まず4人の方がいらっしゃいますので、自己紹介を兼ねて、これまでの活動や、その中で考えられてきたことなどをお話していただきたいと思います。まず宇野さんからお願いいたします。



#### (宇野)

失礼いたします。私は今治市の老人クラブの会員の1人でございます。私の時間の中で、私自身の生活時間を除くと、一番長く老人クラブ活動に時間を使っていると思います。具体的なことをお話したいと思います。

私はこの老人クラブ設立に当たり最初は大変消極的で、小学校の式典の際に、校区の老人クラブの会長さんから、「あなたの地域は老人クラブがないのだけれど、ぜひ今年度中に作ってくれませんか」と頼まれました。その一言から始まったのですけれども、「何とかやってみますよ」ということで取組を始めました。

最初はいろいろ事務的な会則から始まるわけですが、そういうことはさておき、とにかく人が来てくれなければ老人クラブもできません。これから人をどのようにして勧誘しようかなというのが、私の大切な活動の始まりになりました。

私の住んでいるところは今治市郊外で、私が育った頃は田んぼがたくさんあり、農業中心の地域でしたけれども、今は住宅地に変わりつつあるところ

です。知り合いもいましたので、それを頼りに頼んでいこうと思いました。でも、今まで集まったことのない人たちが集まってくるためには、「こんなことしますよ」と言わなければいけないと思いました。それで、何も準備がなくても体があれば参加できるようなもの、私の手に負えるもので思いついたのが、コーラスと体操でした。そして活動場所を公民館におき、「こういうことをするから会員になってくれますか」と1人1人頼んでまいりました。

何ヶ月かかかり、65人でスタートしました。公民館で行う、その2つの活動を中心にして、その他みんなが集まって楽しく過ごす「みんなの集会」という名前をつけての活動と、公民館を離れてもっと広い場所へ行く「特別活動」を行ってきました。そして特別活動の中には環境美化、植栽活動があります。四国遍路無縁墓地とその周辺、しまなみアースランドなどで行い、もう12年間続いております。

そうこうしているうちに、私たちの老人クラブの名前が「小泉青空クラブ」というのですけれども、皆さんにも知られるようになり、小学校からは歌を活動の元としている元気な団体ということでご案内いただいたり、そういう機会も得ることができました。



そして私の生涯の趣味として生け花をしているんですけども、入学式には大きな花瓶にお花を生けました。今年の入学式で33回目になりました。そして4年生では今治城の見学というのがありますが、私が中心になって今治城の見学案内をしています。そういったものが小学校の教育課程の中での活動になります。その他の活動ではこどもたちのラジオ体操もあります。ですが残念なことに、昨年度のラジオ体操は夏休みの初めと終わりの3日間、今年

は最後の3日間のみになりましたので十分なことができませんでした。という  
ようなことで、あれこれ老人活動を現在も続けております。以上です。

(有馬)

宇野さんありがとうございました。活動の状況がはっきり分かりました。  
続きまして河本さん、お願いいたします。

(河本)

皆さんこんにちは。河本歩美と申します。イントネーションでお分かりか  
と思いますが、私は京都からやってまいりまして、NPO法人地域共生開発機構  
ともつくという団体の理事長をしています。



他にも社会福祉法人の京都福祉サービス協会に勤めていまして、高齢者施  
設の設置や他にもいろいろとやらせてもらっています。ケアワーカーを元々  
やっていましたので、介護の道で30年やってきているという経歴になりま  
す。



介護の、特にデイサービスなど通所介護を利用されている要介護認定を受けられている方が、いつまでも社会の中で役割を持って過ごしていただきたいなと思っていて、「sitteプロジェクト」という名前をつけて、要介護認定を受けられた高齢者の方が働く就労的な活動を通じて社会参加をするという取組をしています。その取組を更に広げていきたい思いもあってNPO法人を作りました。

NPO法人ともつくでは、主に3つの活動を行っています。まず1つ目が京都嵐山にお借りしている場所を拠点に、多世代交流拠点の運営をしていること。次に、先ほど言った就労的活動の実践・伴走支援、そして他にも受託事業研究協力等もしています。

多世代交流拠点の運営については研究所の先生の家をお借りしているので、高齢者の方々がやりたいことを実現してもらう場であったり、多世代で交流してもらえようにおもちゃ病院の方に来ていただいたり、子どもたちに集まってもらったりといった活動も行っています。



次に就労的活動と言いましたけれども、本当の就労というところまではなかなか難しい場合がありますが、働くということをキーワードにして何かしら役割を持っていただくということで、企業の方と連携していろいろなお仕事に取り組んでいただくなどしています。



ともつくとしては、人生の中での「Fourth Career」を提案したいという思いもあります。仕事のキャリアの中で、第一のキャリア、第二、第三のキャリアがありますが、高齢者にとって第四のキャリア、「Fourth Career」という新しいカテゴリーを設けて、要介護状態や認知症になった方でもできることで活躍していただこうと、高齢になっても誰かの役に立ちたいと感じている高齢者が活躍できる場所を提供したいと考えています。

ともつくのミッションとしては、高齢者を中心にすべての方が地域社会で力を発揮し、役割を担いながら、生涯現役で生き生きと共生できるまち作りを目指したいと思っています。ビジョンとしては、はたらくことを通して、地域社会で役割を持つことができる持続可能な社会を実現していこうと思っています。以上、紹介になります。

#### (有馬)

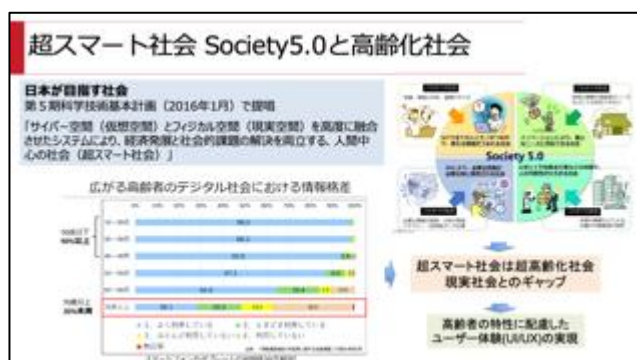
ありがとうございました。活動の内容がよく理解できました。続きまして行木さん、よろしくお願いいたします。

#### (行木)

中央大学の行木と申します。ちょっと読みづらい名前なんですが、よろしくをお願いします。



私は元々、外資系IT企業に長く勤務していて、IT技術を使っていろいろな企業に対するご支援をさせていただいておりました。現在は大学でAIやデータサイエンスを学生に教えています。研究の対象としては高齢化社会において、今あるIT技術を活用して高齢者の方々がより便利に情報を得て、社会生活を豊かにしていくにはどうしたらよいかを考えています。



「Society5.0」という言葉を聞いたことがありますでしょうか。2016年に科学技術基本計画の中で掲げているのですけれども、デジタルの空間と今私たちがここで住んでいる空間をシームレスに融合して、誰もがそういった最先端の技術を享受しながら生活できることを目指しています。「Society 5.0」を考えたときに、これから迎える日本の高齢化社会の中で、本当にそんなことを実現できるのだろうかとすごく危惧を感じました。



例えば若い世代ではスマートフォンを使うのがもう当たり前になっていますけれども、高齢者の中ではそれほど浸透していなかったりする。私もそうですけれども、だんだん小さい字が見えにくくなったり、手が乾燥してスワイプができなくなったりとか、そういうところをもっとユニバーサルに、いろいろな人が使いやすいようなインターフェイスを提供できないかなということを考えていました。

でもよくよく考えるとスマート端末の操作が難しすぎたり、そうではなくてもっと技術が進歩して「電気つけて」や「テレビつけて」など、自分の言葉で表現すればシステムが動いてくれる、そういう世界が実現できればもっともっと豊かに、テクノロジーを享受できるのではないかなということも思っています。

次に「アンビエント・コンピューティング」。これもちょっと難しい表現なのですが、アンビエントは環境というような意味があります。環境に融合したコンピュータみたいなものがあって、それが皆さんの生活を支えていく、そういうことができればずいぶん変わっていくのだろうなと思います。



裏ではセンサーが動いたり、音声を認識するような技術だったり、難しいことをやるのですけれども、使う人はそんなことは何も考えなくていい。例えば家にいるのだけれども、地域のコミュニティにリモートから気軽に参加できたり、今まで培ってきた経験を生かしながら、若い人にいろいろなことを在宅で教えてあげたり。知りたいと思ったら、「〇〇が知りたいのだけれど」と言ったら知りたい内容を教えてくれるような仕組みがあったり。

いろいろな制限が出てくる中で、その制限を取り払いながら自分のスタイルに合った形で技術が支えていくようなことができないかなというのを考えながら調査をしています。こういった考えが浸透すれば、高齢化社会の中で様々な貢献ができるのかなと思っております。今日は皆さまとのディスカッションをすごく楽しみにしてまいりました。よろしくお願いいたします。

(有馬)

行木さん、ありがとうございました。非常に分かりやすい説明で、カタカナ語も簡潔に解説してくださいました。それでは村岡さん、お願いいたします。

(村岡)

皆様こんにちは。初めてお会いする方もいらっしゃるかと思いますし、どこか県内の研修等でお会いした方もいらっしゃるかと思います。本日は聖カタリナ大学人間健康福祉学部社会福祉学科の教員としてお話させていただければと思います、村岡でございます。どうぞよろしくお願いいたします。



自己紹介をする前に少しだけ本学の説明をさせていただければと思います。本学の松山市駅キャンパスは松山市の中心部の松山市駅のすぐそばにある非常に立地のいいところにございまして、看護学部看護学科がございます。もう1つ、JR伊予北条駅から徒歩10分ぐらいのところにあり、瀬戸内の海と緑豊かな山に囲まれた北条キャンパスで学生たちが勉強しています。私が所属する社会福祉学科は北条キャンパスにあり、社会福祉士の養成をしております。



私自身は、2016年から本学社会福祉学科で社会福祉士の養成に携わっておりまして、2022年からは大学院でも社会福祉、医療福祉、さらには地域福祉の研究と教育に従事しております。ここ数年の研究では、「地方都市における多文化共生のあり方」や「地域共生社会の実現に向けた住民主体の地域づくり」などに取り組んでいます。また、介護の人材不足や介護労働についても研究のテーマとして主軸を置いて活動しているところでございます。

社会福祉学科は来年度4月から他の学科と建設的な融合のもと「現代人間学科」として新たに生まれ変わります。新しい学科では、既存の学科にあった社会福祉学、心理学、社会学に加えて、データサイエンスの領域も加えた4つの学問領域を横断的に学べるようになります。このような学科に生まれ変わりますので、そちらで研究と教育にまい進していこうと考えております。

本日は現場の方々がいらっしゃっております。そして会場には専門職、地域住民の方々がいらっしゃいますので、ぜひ活発な討論ができればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## (有馬)

村岡さん、ありがとうございました。それぞれの自己紹介と活動内容がよく分かりました。では早速、今日のテーマに進みたいと思います。

最初のテーマは「誰もが年齢やその他の属性に関わらず、人や社会とのつながりや役割を持ち、活躍できる居場所をつくるために何が必要か」です。その中で2つお聞きします。

1つ目が、高齢化や人口減少が進む中で、高齢者が他の世代と交流できる居場所を持つことのメリットや効果。社会にとっての意義としてどのようなことが考えられるか。

2つ目が、高齢者をはじめ他の世代等が居場所を持つために、どのようなことを心がければよいか。誰もが気軽に参加するためには、日頃から心がけておくことはあるか。

ではパネリストの皆様は何っていきたいと思います。まず宇野さんから、実際にエイジレス・ライフにおいて老人クラブ設立やサロン開催、小学校との交流を実践されている立場からお話をいただけますか。

## (宇野)

はい、1つ目については先ほどの活動紹介の中で申し上げましたので、2つ目について、活動の中で実感していることや、地域で活動したいと考えている個人をどのように巻き込んでいくかについてお話しします。

先ほどお話ししました小学校の活動の中に、全校で行う生徒活動があります。これも教育課程の一環として行われており、「焼き芋集会」という行事がありました。子どもたちが苗植えから始めて、さつまいもを収穫し、焼き芋

を作ります。この活動に私たち老人クラブの会員も参加しましたが、その日「今日は楽しかった」と言う声をたくさん聞くことができました。その実感として私が捉えていることをお話しします。

老人クラブを結成してから、私たちの校区には4つの老人クラブの団体が所属しています。それに加えて、今治市全体の連合会である「市老連」もあり、それぞれの団体がさまざまな活動を行っています。その中で、私が一番身近に接しているのは、自分の小さな単位の老人クラブです。

現在、私たちのクラブには87名の会員が登録しており、毎回80名近くの方が会場に集まると大変なのですね。コーラスだけに参加される方もいれば、体操を中心にされる方もいます。初めは体操に参加する人が少なかったのですが、次第にコーラスの方と人数が近づき、現在はどちらも20人余りのバランスが保たれております。

このクラブを立ち上げてよかったと感じる点は、「健康」「友愛」「奉仕」という老人クラブのスローガンに沿った活動が、参加者にとって大きな意義を持つようになってきていることです。

「健康」の面では、参加される方が活動を通じてだんだん明るくなっているのを感じます。また個人個人についても理解が深まり、これまで挨拶程度しかしていなかった隣の方とも会話が生まれるようになりました。さらに、クラブ内での関係だけでなく、会員同士がほかの活動にも誘い合いながら参加の幅を広げていることが印象的です。例えば、グラウンドゴルフのクラブに参加したり、音楽の発表会に足を運んだり、会員それぞれの活動や居場所が広がっていることが大変ありがたいことだと思っています。

先日FC今治がJ2に昇格が決定しました。そしてアースランドの皇帝ダリアとコキアが今見頃です。そこで、看板に「FC今治 頂点を目指せ 皇帝ダリアのごとく」と、小さい看板を掲げております。そういうささやかな応援の

団体もできて、少しずつ地域とも溶け合うような活動もしております。その甲斐があるからこそ、いろいろな会合に参加することができています。他の校区で行われる行事や、運動会、作品展、カラオケ大会にも参加できて、大変ありがたいことだと思っています。

一方で、クラブには全く活動に出てこない会員さんもあります。そのような方々については、クラブ設立当初から一人一人にお話ししに伺うことを行っており、振り返ればこれも「友愛訪問」の一環だったと思います。会員一人一人を理解し、認め合うこともできるようになってよかったと思います。

さておき、先ほどアースランドのことを言いましたが、高齢化でだんだん動ける人が少なくなってきました。そして課題として感じているのは、後継者の確保が難しくなっていることです。そのため、社会福祉協議会が開催しているボランティア講座などの場を活用し、地域の人々に働きかけていく必要があると感じております。

まとめますと、私は老人クラブという団体を元にして、そこから足がかかりで自分の行く場所や楽しめる場所ができて良かったなと思っています。

#### (有馬)

ありがとうございます。すばらしい活動実践のお話しでした。それでは行木さん、いかがでしょうか。

#### (行木)

ありがとうございます。IT視点を期待されているかと思いますが、その辺りもお話しさせていただきたいのですが、今宇野さんがおっしゃられたように、やはり対面で関係性を作りながら高齢者も若い方も一緒に活動できるような居場所を提供するのは非常に重要だと思っています。例えば、そうい



うところにリモートからも参加できるような仕組みを我々が提供できれば、さらに広がりが出るのではないかと考えています。

例えば、今スマート端末はいろいろな情報やどこかに参加するための入口になっているので、それを継続して使うことや、使ってみたいと思ってもらえるきっかけを提供するのは非常に重要だと考えています。

今、独居の高齢者が増えています。例えばスマート端末を使おうとしたときに子どもや孫が近くにいれば、「おじいちゃんこうやって使うんだよ」と言って教えてもらいながら使えるし、その会話自体がコミュニケーションになったりするのですけれども、実際そういうことはなかなか行えないと思います。そういうことを例えばリモートから提供できれば、東京にいる孫が松山にいるおばあちゃんおじいちゃんに教えてあげる、みたいなのもできるのかなと考えています。

松山市で行っている「生き生きチャレンジ事業」の中にスマホ教室というのがあり、健康に関するいろいろなアプリケーションの使い方みたいなものを教えてくれるのだと思いますが、そういう活動はすごく重要だと思います。またポイントがもらえるシステムで、今日もそのために参加された方もいらっしゃるかもしれないのですけれども、そのようにモチベーションを持てるようにする仕組みも重要なのだと思います。例えば「ここに来たらポイントがもらえる」「ポイントが3つたまったら温泉の券がもらえる」など、ITだけではなくて、そこに付随するいろいろな仕組みがあるということです。ですので、私はテクノロジーの視点からいろいろなこと考えるのですけれども、テクノロジーだけでは絶対に何もできません。テクノロジーを使う人がいれば、それから使っているいろいろな恩恵を得る人がいる。そういう人たちが一緒になってものを考えて、居場所を作っていくと良いのではないかと考えます。



## (有馬)

ありがとうございました。テクノロジーを利用して人と人とのつながりを増やす、これは非常に重要です。それでは村岡さん、地域住民の暮らしのあり方について研究されている立場から、また松山市の地域福祉活動推進計画の策定に参画された経験等からのご意見を承ればと思います。

## (村岡)

先ほどの行木先生のお話を伺いながら、対面の実践やサロン活動の良さと併せて、リモートやデジタル手段をうまく併用しながら、双方のメリットを駆使して実践していくことが重要なことかなと思いました。

以前、学生と一緒に地域包括支援センターと共同で、ある地区の高齢者の方々の実態調査を行ったことがあります。その際、集いの場への参加を促進する要因と、逆に阻害する要因についても分析しました。その結果、阻害要因として多くの方が「交通手段の確保が難しい」「身近な場所に集いの場がない」「参加するためのコストがかかる」といった回答をされました。また、今は退職後も継続雇用やパート、アルバイトなどで就労する方が増えているので、働きながら集いの場への参加やサロン運営するとなると負担が大きい、という声もありました。ですから、こういったものに参加するのは非常に有意義ではありますが、一方で参加者への負担をどう軽減するかというのも重要な課題だと思います。

ここからが本題ですが、高齢化や人口減少が進む中で高齢者が多世代と交流できる居場所を持つことのメリットは何なのかということ、過去の研究等でも言われていますように、高齢者個人の生きがいや楽しみ、そして心理的身

体的社会的な健康の向上、つまりウェルビーイングに寄与することとされています。

また、多世代と交流できる居場所づくりがもたらすメリットについては、昔からこどもとの交流、多世代と言いながらこどもとの交流というのが非常にケースとしては多かったというわけです。こどもと交流することによって、こども側にも情緒・感情の発達、感性、また社会性の構築にもつながっていくということで、双方にとって非常に有効なメリットがあると言われてきております。さらにこれが継続して実践されていくことによって、今度はコミュニティの形成や再構築、集団の凝集性につながっていくということも言われています。

#### (有馬)

ありがとうございました。地域コミュニティの形成において、多世代交流の持つ意味をよく理解できました。次に河本さん、多世代の交流を通じて高齢者が発信側に立つ活動を推進されている立場からのご意見をお願いできますか。

#### (河本)

はい、先生方や宇野さんが今おっしゃっていたように、私も居場所づくりを進める中で、いろいろな年代の方々と関わっています。うちの居場所づくりは、比較のお元気な高齢者の方が多いのですが、中には虚弱な状態になって認定を受けている方もいらっしゃいます。それ以外にも、大学生やこどもたちが来てくれて、いろいろな世代が集まる場所になっています。

月に2回、コミュニティカフェを開いていて、そこが皆さんが集まる大事な機会になっています。例えば、大学生が高齢者の方にスマホの使い方を教え

る場面があったり、次回聞きたいことを準備して楽しみに来られる高齢者の方もいます。それに応えようと、大学生も一生懸命準備してくれたりしています。

こどもたちとの活動では、一緒に調理をしてランチを食べる機会を作っています。こどもたちが卵を割るのを、高齢者の方がすごく慎重に見守ってくれるような光景もあります。そういう自然な形での交流や、それぞれの得意なことを生かしながら交われる機会を作ることが、とても大事なのかなと思っています。

私自身は、高齢者の方が受け身になってしまいがちな状況、例えば「何をしたい」「どこに行きたい」という気持ちを発することができなくなっているのが気になっていて、もっと気軽に話せる環境を作りたいと思いました。また高齢者の方が職員にありがとうと言ってくれることが多いのですが、職員の方が高齢者の方にありがとうと言えるような活動をしたいというのが、活動を始めたきっかけでもあります。そこから、全国で就労的活動を展開しているデイサービスなどの事例も参考にしながら、現在活動を進めています。

やっぱり「ありがとう」はすごく大事な言葉だなと思います。お互いに「ありがとう」と言い合えることで、「その場所に居てもいいんだ」「思うことに取り組んでいいんだ」と思える。ありがとうと言われると、自分も必要とされていると感じることができると思います。それによって次の一步を踏み出せるのではないかなと思っています。だから、そういう場面が自然と生まれる環境を作ることが、居場所づくりには必要なのではないかなと思います。

## (有馬)

ありがとうございました。必要とされている役割があるという場面を作ること、とても大事なことだと思います。今回のディスカッションを通して、私たちの理解も少しずつ深まってきたのではないかと感じていますが、先ほど内閣府の方からもお話がありましたように、この場で何か結論を出すという目的ではありません。今日のフォーラムで出た話を参考にし、皆様それぞれが個人として、またはグループでの活動に生かしていただければと思います。

次のテーマですが、高齢期においても、誰もが年齢や性別に関係なく、地域で人や社会とのつながりや役割を持ち、活躍できる居場所づくりをどう進めていくか、という点です。具体的には3つのポイントについてお話しいただければと思います。

1つ目は、現状の課題認識や今後のあり方についてです。ニーズに応じた居場所が十分かどうか。足りないとすれば、その背景・要因は何か。また実際の活動の中で感じる課題は何か。

2つ目は、各地域のニーズに応じた居場所を作るために、地域社会を構成する団体や企業、行政などがどのような役割を担えるか。またそのために必要な具体的な取組は何か。

3つ目は、多世代を巻き込み、交流を活性化するための工夫やきっかけについてどのようなことが考えられるか。

まず河本さんからお願いします。

(河本)

私は就労的活動に取り組んでいますので、その観点からお話しさせていただきます。特に企業の方々との対話がとても重要だと感じています。同じビジョンを共有し、高齢者の方への理解を深めることが大事だと思います。就労的活動を進めていると、「夢を持てる社会になっていくような気がします」と言って協力してくださる企業の方もいらっしゃいます。そういった企業さんと同じビジョンを描けることが大切だと思っています。

(有馬)

ありがとうございました。対話を通じて同じビジョンを共有すること、とても大事ですね。それでは村岡さんお願いできますか。

(村岡)

地域社会として居場所づくりをどう進めていくかという点では、行政機関だけではなく、地域住民や民間企業、NPOなど、地域にある全ての社会資源やネットワークを活用することが大切だと思います。これが地域社会に向けた居場所づくりの大きなポイントになると思います。

(有馬)

ありがとうございました。地域社会にある全ての社会資源を活用するという視点は重要ですね。最近では「資源」という言葉もよく耳にするようになりましたが、昔は海の資源や鉄鋼資源といった意味で使われることが多く、少し難しい言葉でしたが、今ではだいぶ一般的に使われるようになりました。それでは行木さん、お願いいたします。

## (行木)

居場所づくりにテクノロジーを取り入れることで、より快適な空間にすることができると思っています。最先端のIT技術やテクノロジーを活用できる人材が居場所づくりに関わることで、使う側の人には普段と同じように過ごしながらか使える快適な居場所。そして裏では技術者や公共機関が手を組んで快適な空間づくりをしていくことが重要だと思います。

技術を使う側が難しいものを無理に使おうとするのではなく、有識者や公共団体が連携して、使いやすい環境を提供していくことができると良いなと思っています。その結果、訪れる方々が自分の経験を共有したり、磨いてきた技術を若い世代に教えたりと、悠々自適に交流できる場が生まれるのではないかと思います。技術者や公共団体、地域が一体となって、誰もが快適に使える居場所を作ることが大切だと感じています。

## (有馬)

ありがとうございました。 それでは宇野さん、お願いいたします。

## (宇野)

これまでもお話しさせていただいてきたのですが、サロンについて少しお話ししたいと思います。

数年前に、社協から「サロン活動をしてください」と言われたことがありました。当初は、サロンというとお茶やお菓子を楽しむ場、食事をする場というイメージが私の中で強かったです。でも実際にはそうではなく、みんなと一緒に何かに取り組む場、それがサロンなのだと私の意識も変わったような気がします。例えば、主な活動場所である公民館では、参加者がそれぞれお茶を持ち寄ったりするだけの場です。ですが特別活動で外に出て環境美化

活動を行う際には、楽しいお茶会や食事会を開き、皆さんをおもてなししております。そういった工夫をすることで、皆さんとても喜んでくれます。

### (有馬)

ありがとうございました。サロンというと、お茶を飲んだり食事をしたりするだけではなくて、みんなで一緒に考え、一緒に取り組み、一緒に成果を共有する場ということですね。

それでは最後に、「誰もが年齢や属性に関わらず、人や社会とのつながりや役割を持ち、活躍できる居場所をつくるために必要なこと」をテーマに、フリップにお考えを書いていたいただきました。順に発表いただきたいと思います。では、村岡さんからお願いいたします。

### (村岡)

はい、皆さんのお話を聞きながら感じたのは、居場所づくりの根底に「地域への愛着」や「地域の誇り」があるのかなと感じました。これが重要なベースになると考えます。

先行研究の中では、過疎化による若者の流出が進み、残された住民が漠然とした不安の中で日常生活を送り、主体性を失いながら、そして地域の課題を見過ごしながら負のスパイラルに陥っていくとも言われています。このような「心の過疎化」ではなく、地域への愛着や誇りを育み、ベースにしながらか展開していくことが居場所づくりの原点になるのかなと思います。





(有馬)

ありがとうございました。「地域への誇り」というキーワード、確かにそうですね。それでは次に行木さん、お願いいたします。

(行木)

私は「居場所を支える人間を中心に据えたテクノロジー」と書きました。多分、居場所というのは宇野さんがおっしゃったように、皆さんご自身が作っていくものですし、村岡先生のお話にもあったように地域に



対する愛情などが醸成していくものだろうなと感じます。その際、テクノロジー技術はそれを支える裏方なのだろうなと思います。「すごい技術がある」と自慢するのではなく、そこにいる人々が生き生きと活動できるように、人間にフォーカスして人間を中心に据えたような形で、居場所を支えていけるような取組ができれば、居場所の活性化にも寄与できるのかなと考えました。

(有馬)

ありがとうございました。河本さん、お願いします。

## (河本)

私は「たこ焼きをみんなで」というフリップにしました。関西では一家に一台たこ焼き器があると言われるくらい、たこ焼きは身近な存在です。松山の方でもたこ焼きってよく焼かれますか。



居場所づくりの場で、よく「食べ物系のイベントが多いよね」と言われることがあります。料理をみんなで共同作業として行うのは、自然と役割分担が生まれる良い機会だと思います。たとえ直接作業に参加できなくても、その場において声をかけて盛り上げるだけでも立派な役割になります。

先ほどのお話にもありましたが、「みんなで一緒に取り組む」ということが居場所づくりにはすごく大事だと私も感じています。それぞれが得意なことで力を発揮できるように、私たちは少しアシストする役割を果たせばいいなと思っています。

たこ焼きも実は1回目は鉄板が馴染んでいなくて失敗することが多いんですよ。でも2回目、3回目とやっていくうちにだんだん良い具合のが焼けるようになります。そういう失敗を繰り返しながらみんなで何かに取り組んで、1つの目標に向かっていくことがとても大事だと思います。

## (有馬)

ありがとうございました。それでは宇野さんお願いいたします。

## (宇野)

私は「地域のコミュニティづくり」と書きました。私たちの地域では、コミュニティ連絡協議会が中心となり、年間通じて、住民運動会、盆踊り大会、文化祭など、地域住民と一緒に楽しめるイベントを企画しています。小さな子どもから高齢者までが参加できる活動、いわゆる共生社会です。



ぜひこういう行事に参加して、地域の力、みんなが団結する力、楽しさを味わう力にしてもらいたいと思います。そのために、私のいる老人クラブからも積極的に連絡協議会が催してくれる行事には参加できるように、みんなを元気づけたいなと思っております。

また、私たちの会では地域包括支援センターや民生委員とも連絡を取りながら活動しており、今後もつながりを深めていきたいと思っております。今後は、コロナの後におみこしを担ぐ祭りも回復したので、参加することもや大人たちを励まし、さらに楽しくできたら良いなと思っております。

## (有馬)

ありがとうございました。それでは、最後に私の考えも書かせていただきました。「全ての人々に対する敬意 団体は敬意の共和国」です。

人は自分が尊重されていないところに普通は来たがりませんよね。逆に、いつ行っても、誰が来ても「よく来



てくれたね」と尊重し、温かく受け入れてくれるとそこに人が集まります。よって私も相手への敬意、相手を敬うことを大切にしています。また、同じグループの中で批判しあうのは良いですが、非難するのはいけないと。非難されると人は来なくなってしまいますので。ですから「全ての人々に対する敬意 団体は敬意の共和国」であると、私は常々思っております。

これにてパネルディスカッションを終了しますが、今日は4人のパネリストの皆さまがそれぞれの立場から最大限の課題提起をしてくださり、ありがとうございました。コーディネーターとして、心から感謝申し上げます。最後に2つだけ私からお話させてください。

まず私が以前から抱いていた疑問について、実は今日の行木さんのお話を伺い、その疑問が少し解消されました。行木さんが超スマート社会Society 5.0と高齢化社会についてお話された中で、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」という説明がありました。

ここで「人間中心」つまり「Human Centered」という表現について、私は手塚治虫さんがヒューマニズムを批判された言葉を思い出しました。手塚さんは「ヒューマニズム」という言葉が嫌いで、「人間中心」というと人間の周りにいる動物、植物、環境などを切り離してしまうのではないかと懸念していたのです。

私自身も「人間中心」というと他のものは考えなくて良いのかなと少し思いましたが、今日の行木さんのお話を伺って、経済発展と社会的課題は人間だけでなく環境ともつながっていると理解しました。それは動物、植物、環境と人間が切り離せない関係にあるからこそ、これらを含めた「人間中心の社会」が実現可能なのだと納得しました。

そして最後に一言。今日はパネルディスカッションですが、これを「シンポジウム」とします。古代ギリシャで「シンポジウム」とは、みんなで飲んだり食べたりする集まりを意味していました。日本語に訳すと「饗宴<sup>きょうえん</sup>」という言葉です。ですから本来のシンポジウムの意味に倣い、今日のパネルディスカッションにおいても、あまり難しいことを考えて結論を出すというよりも、それぞれが持ち帰り、みんなで話を聞いてよかった、今後の参考にしようと思っていただけだと思います。

改めましてパネリストの皆様、ご参加の皆様、ありがとうございました。これで終了させていただきます。

## 事例紹介

わたなべ くらこ  
渡辺 クラ子

岩手県奥州市

ご近所福祉スタッフの渡辺と申します。今は高齢者やスタッフの皆さん、民生委員さんたちと楽しく、高齢者の皆さんを見守っているか、見守られているか分からないのですが、楽しい毎日を送っています。



### 【ナレーション】

渡辺クラ子さんは、地域住民とのつながりを重視し、岩手県奥州市で町内会理事を20年間、民生・児童委員を6年間務めるとともに、老人クラブや婦人会でもリーダー的な存在として活躍しています。また、地域に居住する高齢者が楽しみながら健康・仲間づくりができるサロンなども主催しています。



さらに、58歳の時にヘルパー2級の資格を取得し、通院介助を行うほか、高齢者支援、見守り等のご近所福祉スタッフも担うなど、地域福祉の向上にも努めています。

#### <活動を始めたきっかけ>

昭和50年、渡辺縫製を起業し、地域の人たちに助けていただきながら、既製の縫製を23年ほどやりました。縫製の仕事をしていた当時、社会福祉協議会で配食サービスを行い、弁当の配達ボランティアも活用しました。

仕事の合間に一人暮らしの方や老人世帯を訪問し、1週に1度届けながら、皆さんとお話しする機会がありました。楽しみに待っていてくださる様子を見て、次は何をしようと思いました。ボランティアを始めることにしました。

#### <苦勞したこと>

50歳を過ぎてから介護講習を受け、介護ボランティアを始めました。現在も1人で通院できない方などの話し相手や通院介助を手伝っています。町内では民生委員のなり手がいないと、会長さんや役員さんの訪問を受け、60歳を過ぎてから民生委員になりました。民生委員の間に、岩手宮城内陸地震や東日本大震災があり、町内の皆さんに声をかけ、大船渡までボランティアに行ったこともありました。

#### <活動を続けてよかったこと>

町内の一人暮らしや老人世帯の方たちが楽しく過ごせるようにと、「生き生きサロン」が25年も続いており、民生委員やご近所福祉スタッフでアイデアを出し合いながら、月に1回楽しみながら進めております。

私の趣味は、手芸やリズムダンス、グラウンドゴルフをすることです。できるだけ元気でエイジレス・ライフを送れるようにと思っています。これも地域や町内、家族の協力があったのことに感謝しております。

## 事例紹介

NPO法人 コミュニティNET<sup>ねっと</sup>ひたち

茨城県日立市

---

私は特定非営利活動法人コミュニティNETひたち代表理事の久保裕です。



### 【ナレーション】

NPO法人コミュニティNETひたちは、2002年に茨城県で初めて情報通信技術による社会貢献を目的として発足しました。会員の経験や知識を生かし、パソコン教室や市と連携してスマホ等の操作に困っている高齢者を対象に相談会を開催しているほか、要支援の認定を受けた高齢者を対象に、スマホで脳トレを行う通いの場を運営しています。また、小中学生を対象とした「ひたちパソコン探検少年団」の活動を支援しており、幅広い年齢層を対象に地域に根差した活動を展開し、地域福祉の推進に貢献しています。

### <活動を始めたきっかけ>

特定非営利活動法人、いわゆるNPOで活動を開始した時期は、今から22年前の2002年からでした。私は60歳を過ぎ、定年退職してぶらぶらしていた時期でした。市内の小中学校にパソコン教室ができて、教員のサポートが要請されました。個人がメールによる文通やホームページを開設して情報交換ができる時代となり、パソコンのWindows XPが発売されてパソコンが企業から家庭や個人に普及し始める時期でした。

### <苦勞した点／工夫した点>

家庭の主婦など、パソコン初心者に分かりやすいパソコン講座を開催しました。そして、繰り返し指導することでした。パソコンが故障して動かなくなったり、ネットが接続できなくなったり、ウイルスや迷惑メールに汚染されたりしたパソコンの修復など、パソコンの個人相談や指導に積極的に取り組みました。定年退職して、あるいは家庭の主婦をしながら講師をしている会員が最新の技術を取得し、リラーニング（再学習）をするために、PC技術交流会やスキルアップ講座を定期的を開催してまいりました。

### <活動を続けて良かったこと／今後の展望>

高齢者が主体でスタートした団体ですが、平均年齢が74歳になり、なお続けることができました。パソコン、タブレットやスマホなど進化し続けるICT機器の最先端技術を常に生活の道具として使いこなし、デジタル化、DX社会の時代にマッチして、高齢者が安心してデジタル技術を学習する場を作ってきたことです。最後に今後の展望については、人生100年の時代で、エイジレ

スで高齢者もスマホを日常生活で使い、パソコンやタブレットも使って生活を楽しめる、そんな社会づくりを支援していくことです。

## 事例紹介

グリーンハイツ「ゆいの広場」

神奈川県横須賀市

---

グリーンハイツ「ゆいの広場」代表、石塚千津子です。よろしくお願いいたします。



### 【ナレーション】

グリーンハイツ「ゆいの広場」は、横須賀市長沢地域や津久井地域にまたがる集合住宅群グリーンハイツで活動する住民の有志団体で、生活支援活動に加え、認知症カフェやコミュニティカフェも運営しています。コロナ禍でもオンラインツールや感染症対策を取り入れて活動を続けました。また、神奈川県立保健福祉大学との連携を始め、様々な方や団体ともつながり、多世代交流にも取り組むとともに、認知症の本人や家族の支援にも積極的に取り組んでいます。



### <活動を始めたきっかけ>

活動を開始したのが2012年5月からで、1年間準備期間を経まして、2013年5月に発足いたしました。きっかけは、横須賀市役所の出前トークというのを聞きまして、そこでグリーンハイツの高齢化がこの先どんどん進んでいくというのを初めて聞き、かなり衝撃を受けまして、横須賀市内でもう既にこういう助け合いの団体が立ち上がっているというのを聞きまして、ぜひ我々の地域にも作りたいなと思ったのがきっかけです。

### <苦労した点>

苦労したのは、有償ボランティアということを経験して活動を始めたのですが、自治会への受入れがなかなか難しかったことです。今でこそ本当に管理組合や自治会に理解をいただいています。当初は会場を借りることから大変な思いをした記憶があります。そこで、「ゆいの広場」はこんなことをしているということを住民に知らせたいと思い、大学の先生やお医者さんに来ていただいた講演会などをしまして、皆さんに聞いていただいて、「ゆいの広場」という団体を知ってもらいました。

### <活動を続けて良かったこと／今後の展望>

活動を通じて知り合いがたくさんできたことです。そして信頼できる仲間がたくさんできたことです。この団地にいつまでも安心して住んでいられるという確信を持ってました。

今後の展望は、若い方たちとずいぶんつながりができたので、その若い方たちとの組織づくりができたらいいなという風に思っています。そして、自分たちが年を取っても、この団地の中で本当に楽しく笑顔で、いつまでも暮

らしていけるような、そんな団地の中で生活できたらいいというのが展望  
です。

## 事例紹介

生駒市アマチュア無線非常通信協力会

奈良県生駒市

チャンネルチェック。

はい、こちらは生駒市アマチュア無線非常通信協力会。



【ナレーション】

生駒市アマチュア無線非常通信協力会は、災害に強いアマチュア無線の特性を生かし、市の災害対応に協力しようとの趣旨から令和2年に設立されました。以降、毎年大規模災害を想定した市との連携訓練を実施し、活動要領の改善、習熟を図っています。

ほかにも各種イベントへの出店等も行い、会員が地域社会で活躍できる機会を創出するとともに、新たな「生きがい・やりがい」を生み出し、世代間交流の場にもなっています。

### <活動のきっかけ>

生駒市アマチュア無線非常通信協力会、通称”IAE”と略しているのですが、この組織を作ったきっかけは、元々アマチュア無線をずっとやっていたのですが、大先輩が生駒市で何か大災害があった時に、携帯電話や一般の公衆電話とか、そういう回線網が全部ダメだったら、直接の電波が一番役に立つだろうということで、そういう会を立ち上げたらどうか、とアマチュア無線の会で話が出たのです。その先輩から「私らはもう80近いので会長をやってくれ」と言われたのがきっかけで、2020年に始まりました。

### <苦勞した点／工夫した点>

やっぱりアマチュア無線というのは、しゃべる時に丁寧になりすぎて、いざ緊急の時に時間が長くなる。刻々と災害状況が変わる中、だらだらしゃべってしまう癖があるんですよ。スパSPAと必要なことだけ言う訓練があまりできてないので、その辺は苦勞しています。

あと今はスマホとか、iPhoneとかiPadで遊ぶだけで、インターネット回線がダメになったら一切使えないことを、誰も分かっていないのですよね。実際、大災害になったら、その辺のネットワーク環境は全部アウトになるから、直接の電波で被害状況を報告するのはすごく大事だと思います。その辺、会員を増やして理解をしていただくのにかなり苦勞しています。

### <今後の展望>

今後はやはり若い人を増やすことに尽きます。40代、せめて50代の方はもうちょっと増やして、この組織が永続していけるような、そういう会にならないといけないので、若い人にアマチュア無線に興味を持ってもらいたい。

電気・電波、そういうものに興味を持ってもらうために、生駒市がやっているいろいろなイベントにも参加して、少しでも興味を持っていただきたいなと思います。本当に楽しいのでね。

## 事例紹介

やまだ りょうじ  
山田 良治

福岡県柳川市

---



### 【ナレーション】

山田良治さんは、平成26年3月に管内のタクシー会社と柳川警察署が締結した「地域を見守るサポートタクシー」制度において、タクシー部会の代表として、運用開始から現在まで積極的に地域の安全運動に携わっています。細部にまで通行できる特性を生かして、車両運行中や待機中に地域に密着した見守り警戒活動を行ったり、車内に詐欺被害防止のチラシを掲示したりするなど、犯罪被害の未然防止と安全確保に努めています。

### <活動のきっかけ>

ちょうど40歳になる前に、当時の所長さんと生活安全課の課長さんから、少年指導員の席が空いたから、よかったらぜひ受けてもらえないだろうかというお話がありました。結婚してちょうど子どもが10歳になるかならないかの頃で、自分のこどものことも考え、自分のことも考えて、私によければということでお受けした次第です。

### <苦勞した点>

僕が40歳の頃は、柳川には大川の家具の関係で工場がいっぱいありましたので、シンナーが手に入れやすかったんですね。そして青少年のシンナーの乱用が本当に多くて、夜出たらその日はもう0時、遅いときは2時ぐらいまで補導に回ったようなことがありました。それが皆さんのご協力のおかげで、今は年間に1人もそういうことはない状況が10年ぐらい続いています。これを僕は補導員として誇りに思っております。

### <今後の展望>

今後の展望としては、今の若い人たちに日本を支えていってもらえる必要があるので、犯罪や事件、事故のない世の中を皆さんの協力で作ってもらえれば、これが何より幸いだと思います。



## 事例発表

たにじゅうごう  
谷住郷100年マルシェ

島根県江津市

---



私は島根県江津市の山間部にある谷住郷から参りました。月2回、「谷住郷100年マルシェ」という名前でマルシェを開催しております。

私たちの故郷も少子高齢化が進み、高齢化率が49.6%と非常に高い状況です。かく言う私も今年76歳でございます。そんな田舎の小さなマルシェに目を留めていただき、このような賞（社会参加章）に導いていただいたこと、一同大変恐縮しつつ、喜びと感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

このマルシェでは、集う人々が気軽に訪れ談笑し、出品者と利用者が交流しお互いに元気になっていただきたいと思います。「100歳になっても元気に暮らせる大好きな故郷」を目指して活動しています。健康増進において一翼を担うことができ大変嬉しく思っております。おかげさまで、次回開催で75回目を迎えます。

こちらが創立メンバー5組8人を含む皆さんの集合写真です。真ん中でグリーンのジャケットを着そびれているのが私です。マルシェは、かつて保育園だった建物が現在コミュニティセンターとなり、そこにあるテラスで開催しております。



記念イベントなどでは、町内の企業の大きな車庫をお借りして行うこともあります。また、街のシンボルだった廃線となった川戸駅の活用や、他の町にも出向いてやらせていただいております。

さらに、音楽イベントもマルシェの一環として企画しています。私も<sup>せん</sup>僭越ながら、琴を弾いております。このような内容で取り組ませていただいております。本日は重ね重ねありがとうございます。



## 事例発表

ちよいワルじいさん作戦会議

岡山県勝田郡奈義町



こんにちは。私たちは岡山県奈義町のちよいワルじいさん作戦会議というグループです。男性高齢者の閉じこもり予防を自分たちの手で進めている真面目なイイじいさんたちです。奈義町は、霊峰那岐山の麓に広がる人口5,568人の緑豊かな街です。

ちよいワルじいさん作戦会議ができたきっかけをお話します。高齢になり、軽トラックの運転が難しくなったりすることがきっかけで、家に閉じこもりがちになって飲酒につながったり、筋力が弱り、要介護状態になっていく男性高齢者の課題が出て、男性高齢者の心理研究や男性高齢者限定の介護予防事業の工夫をしたりしました。

男性高齢者は女性ばかりのところに行くのは苦手。目的や役割がない集まりや話は苦手などの特徴を知って事業を進めてきました。そんな中で自分たちのこととして参加してもらうことが重要なのではないかと、参加者を募集し、7人でスタートしました。

グループ名も男性高齢者が人生の最期までワルさができるように知恵を出し合うということで「ちょいワルじいさん作戦会議」としました。仲間たちは、94歳を筆頭に22人と、その支援者です。

初めて開催したイベントは「ちょいワルの旅」。男性高齢者限定の介護付き日帰り温泉旅行でした。「ちょいワルな囲碁ボール大会」や昔の奈義町の写真を見ながら昔話をする「ちょいワルな同窓会」を開催しました。第2弾・第3弾を開催していきました。



じいさんの居場所「ちょいワルGG道場」を開始しました。GGは「じじい・グレート・元気」の意味です。建物の居場所にこだわるのではなく、「集まること」に意義があるということになり、会場にこだわることはやめました。ちょいワル体操を一緒に考えました。

結成から7年経過して、じいさんたちも超高齢者になりました。いやいや年齢じゃない！企画するじいさんたちも、参加してくれるじいさんや町民の皆さんが元気になるイベントを企画していくぞと目を輝かしています。ご清聴ありがとうございました。

## 事例発表

熊野町シルバーリハビリ体操指導士会

広島県安芸郡熊野町

皆さんこんにちは。熊野町シルバーリハビリ体操指導士会の池田と申します。この度は社会参加事例として、我々の活動を取り上げていただき、ありがとうございました。



私たちは、平成26年会設立以来、「仲間のちからは地域のちから」を合言葉に、「住民による住民のための健康維持」のため、シルバーリハビリ体操の普及活動として、体操教室の運営と依頼団体への会員派遣を行っています。

体操教室は現在、町内に6会場、教室としては11教室を開催しており、依頼団体は40あります。会員は現在52名で、最高齢は86歳の仲間とともに活動しています。



私達の活動は体操普及だけでなく、介護予防や健康づくりに重要な情報の発信、指導士の養成、さらには新たな通いの場の創設支援など、行政と協働し、地域づくりに関わっています。

昨年度、私たちの教室に参加された人数は1万8,221名です。うち教室の参加者は7,894名です。熊野町の高齢者の約1割の方に参加いただいています。

今出ていますのは、その参加者の方からいただいたお言葉です。体が「動きやすくなった」「速く歩けるようになった」「ペットボトルの蓋が開けれるようになった」など、嬉しい声に私達指導士は勇気づけられ、日々の活動の支えにもなっています。



これは私たちの今活動している状況を写した写真ですが、私たちの活動は実は指導士自身の健康づくり、介護予防にもつながっています。実際、会員の中には、指導士の活動を始めてから、病院に通わなくなったという会員もいます。



これからも引き続きこの活動が絶えることのないよう、新指導士の養成を行うとともに、会員のフォローアップを行い、<sup>せつさたくま</sup>切磋琢磨しながら取り組んでいきたいと思ひます。ご清聴ありがとうございました。

## 事例発表

さとう けいし  
佐藤 圭史

広島県尾道市



尾道から参りました、佐藤圭史と申します。

こちらは、私が50年以上前に描いた「ベッチャー祭り」の絵です。このお祭りは鬼の面をかぶった「ベタ」「ソバ」「ショーキ」という3体の鬼が人々をつついたり叩いたりする奇祭です。私は絵を通じて、こどもや個人・団体の皆さんとの関わりを長年続けさせていただいております。





こちらの写真で一番右にいるのが私ですが、15年前に福山空襲を題材にした絵本を制作しました。右が本の表紙で、抱っこしているのが2歳の子、太ももに寄りかかっているのが5歳の男の子です。バラのまち、



平和のまちを願っている福山市で、福山空襲をテーマにした絵本です。これは編集会議の様子ですが、私が絵を担当いたしました。今、福山市の市老連の会長をしていらっしゃる多田先生という方が実行委員長で、ちょうど3年前にエイジレス章を受章なさった方です。多田先生は小学校3年生のときに福山空襲に遭われて、目の前で真っ赤に炎が燃えている様子を見たり、避難される方たちを迎え入れられた方です。

私は尾道美術協会に30歳の時から関わり、16年間会長を務めました。現在は顧問として活動し、36名の会員と一緒に月1回作品を持ち寄り、批評会をしております。また写生旅行、展覧会なども開催しております。この協会は90年前、小林和作先生が設立されたもので、「年齢・性別・会派にとらわれず自由に意見を言い合える会」を理念として発足し、今も続いています。

私の地元、尾道市原田町では、過疎化で閉校となった幼・小・中学校を活用し、芸術文化交流館を設立しました。それと並行して、私は歴史文化同好会の会長も務めておりますが、まずは地元とのきずなを作り、また健康的な体を作り、その中で文化活動をやっていこうと思っております。これからも、過疎化の中の高齢者の健康・きずなづくりに関わっていきたいと思います。ありがとうございました。

## 事例発表

うの すみえ  
宇野 須美恵

愛媛県今治市

---



再びこの場に立たせていただきます。少しお時間をいただき、私たちの活動を支える考えや思いについて述べさせていただきたいと思います。

私がボランティア活動を始めたきっかけは、四国遍路無縁墓地の整備でした。ここは私がこどもの頃には肝試しの場所として使われていたような場所でした。それを「これではいけない」と思い、4人で活動を始めました。以来、メンバーの入れ替わりはありつつも、今日まで続けています。

活動が進む中で場所がどんどんきれいになり、「ヘンロ小屋41号」も建ち、今では散歩をする人々や犬連れの方々の居場所となりました。この活動の名前は、泰山寺と栄福寺という地名から間を取って「泰栄すずらん会」と

名付けました。すずらんは、テレビ映画『すずらん』とお遍路さんの杖のすずらんから取りました。

私の心の支えは「一隅を照らす」という親鸞上人の言葉です。自分にできることは小さなことだけれども、それでもみんなでできることをやっていこうというこの言葉に、私は励まされて頑張っております。

私たちの活動「青空クラブ」では、まず自分自身が元気でいることを大切にしています。健康が一番です。そのために心がけているのが「かきくけこ」の生活です。「か」は感謝。私たちのクラブは、参加してくださる会員の皆さんがいるからこそ活動できています。だから本当に皆さんに感謝しております。「感謝、感激、感動」ですね。そして、私が毎月配る活動のご案内の中によく出てくるのが「人生100歳時代」「健康寿命を延ばそう」「いつもニコニコ元気が一番」といったフレーズです。

また先日今治市役所で「元気でいれば輝く未来」という旗を見て、私にとって輝く未来、あなたたちにとって輝く未来とは何だろうか、ということも考えました。「希望」ですね。

そして何をするにしても「健康」を土台にして「好奇心」を持つことです。好奇心で自分に希望を持ち、気力を高めていく。私の母は「行きたい」「知りたい」「見たい」「食べたい」といった「～たい」の気持ちをたくさん持っておりました。私も好奇心いっぱいこれから的人生を送っていきたいと思います。

12月10日には誕生日を迎えますが、これからも自分の車で運転したいと思っています。また好奇心を持ち、地域の皆さんと一緒に輝く未来へ向かっていきたいと思っております。本日はご清聴ありがとうございました。

## 事例発表

にしむら けいこ  
西村 啓子

高知県高岡郡佐川町



皆さんこんにちは。高知県から参りました西村啓子と申します。

私は平成18年に定年退職して、縁もゆかりもない佐川町というところに移住しました。人とのつながりを作るために様々な集いに参加し、今では並行して、活動をいくつもやっております。

「セカンドライフ夢追い塾」運営委員としてお助け隊員の活動をしております。12月には「サンタが来るまち佐川プロジェクト」というサンタ姿で子どもたちへ、あるいは保育園や福祉施



設にプレゼントを届けるという活動をしています。そのほかにも地域住民の生きがいや健康づくりのために活動を頑張っています。

「さくら・シニア合唱団」としても活動しており、地元の高齢者施設や佐川町内外の音楽イベントなどで合唱したりもしております。

私の出身は仁淀川町大見槍地区です。住民が少なくなってしまった故郷を少しでも元気にできないかなと思い平成27年5月に第1回目の旧交を温める交流会を立ち上げ、開催しました。地元住民7人、里帰りした50人の参加があり、皆さまの笑顔あふれる会となりました。



平成29年に開催した第3回目の交流会では、地元住民のお孫さんが花嫁姿を披露しました。花嫁、花婿姿の2人を見て参加者からは歓声が上がリ、より親交が深まりました。このときも50人ほどの里帰りもあり、地元に活気があふれました。

第6回目の交流会開催は、本年4月となり、コロナ禍の影響もあって5年ぶりとなりました。30人の里帰りがあり、笑い声が絶えないにぎやかな時間を過ごすことができました。地元で暮らす住民は、この交流会を楽しみにしてくれており、地元を離れた人々も、里帰りできる機会になって喜んでくださっています。その他にもサロン活動や100歳体操、検診のスタッフなど、様々な活動をさせていただいております。

本年4月からは平均年齢80歳、10人の仲間たちで誰かの役に立てたら嬉しいね、自分も元気になれるよね。そんな考えから、あったかふれあいセンターで地元住民へのランチ提供の活動も始めました。皆さまからの「ありがとう」の言葉が私の活動の原動力となっております。

これからも、無理をしないでできることをできる範囲で楽しんで活動が続  
けていきたいと思います。ありがとうございました。

## 閉会挨拶

とみた さだのぶ  
富田 定伸

松山市福祉推進部長

---



失礼します。松山市福祉推進部長の富田です。

本日市長は、公務の都合でこちらに参ることができません。市長から皆様へのご挨拶を預かって参りましたので、代読させていただきます。

本日ご参加いただきました皆様には、日頃から高齢者施策にご尽力いただき誠にありがとうございます。また、エイジレス章、社会参加章の表章を受けられた皆様、おめでとうございます。皆様の長年の活動に心から敬意を表します。



この度、高齢者施策を推進するためのフォーラムを松山市で開催できましたことを、大変嬉しく思いますとともに、開催にあたりご尽力いただいた内閣府関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

高齢化が進む現代の社会において、高齢者が年齢にとらわれず、自由に生き生きとした生活を送ることは、何よりも大切なことです。本日、基調講演やパネルディスカッションによる様々な観点からの考察、そして、多くの受章者の皆さまの実践事例や社会参加活動事例をご紹介いただいたことは、ご参加いただいた皆様の今後の活動にとっても、また松山市の今後の高齢者施策、地域福祉の推進にとっても、誠に有意義なものでした。改めて感謝の意を表しますとともに、受章者の方々が今後とも、年齢にとらわれず、素晴らしい活動を続けていくことを願っております。

さて、松山のシンボルである道後温泉の本館が約5年半の保存修理工事を終えて、7月11日にリニューアルオープンしました。本日もご来場されている皆様、同時配信の動画をご覧の方々も明治の良さを残しつつ、新しくなった道後温泉にぜひお越しいただき、日本最古の温泉にゆっくりと浸かって、年齢にとらわれない生き生きとした生活をこれからも楽しんでいただければと思います。

最後に、皆様のますますのご活躍と、このフォーラムが新たな取組につながることを祈念いたしまして、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。本日のフォーラム開催、誠にありがとうございました。

令和6年11月13日 松山市長 野志克仁